



駿府と今川氏

第9回

連歌師宗長と吐月峯柴屋寺

戦国武将が 連歌を好んだわけ

和歌と連歌の違いは、和歌が五・七・五の上の句と、七・七の下の句を一人で詠むのに対し、連歌は上の句がある人が詠み、それを受けて別な人が下の句を詠み、さらに別の人がまた上の句を詠んで繋げていくという点にあった。

最初の句を発句、二番目の句を脇句と言ひ、三番目を第三、以下を平句と言った。

和歌は公家たちに好まれ、連歌は武将、特に戦国武将たちに好まれていた。その理由は何だったのだろうか。

理由の一つとして挙げられるのは、和歌が一人で詠むのに対し、連歌は複数の人が集まって詠むことで、一種のチーム・プレーが要求され、お互いの意思疎通が重要だったという点である。主君と家臣、あるいは家臣同士が集まって連歌会を開いたのは、そうした連帯感を常に培っておくためであった。

また、もう一つ、出陣連歌の存在も忘れられない。当時、「戦いの前に連歌会を開き、そこで詠んだ連歌を神前に奉納して戦いに出

れば勝利する」といった一種の呪術的な考え方があった。

連歌師宗長の役割

戦国時代を代表する連歌師の宗長が、連歌師には珍しく「今川氏抱えの連歌師」だったことはよく知られている。普通、連歌師は「漂泊の歌人」と言われるように、一定の場所に定住することなく旅から旅を続けていたが、宗長は今川氏親から柴屋軒という庵を与えられ、そこに定住したのである。これが現在の丸子の吐月峯柴屋寺の前身であった。

宗長は、駿河の島田の出身と言われている。連歌を宗祇から、禪を大徳寺の一休宗純から修得し、氏親の知遇を得ていたのである。

永正元年（一五〇四）、伊豆の三島社の社頭で詠んだ「出陣千句」は、実際は氏親が出陣した武蔵立川原の戦いに従軍した宗長が、戦勝のお礼として氏親の

意向を受けて詠んだ「凱旋千句」であるが、宗長が一人で千句を詠んだものであった。

こうした出陣連歌の他にも、今川館で開かれる氏親の連歌会をリードしたわけであるが、役割はそれだけではなかった。氏親の諜報機関の役割も果たしていたのである。

連歌師は法体であり、もちろん出家している。出家している者は、俗世から縁が切れているという理由で、敵・味方関係なく全国を往来できた。つまり、敵国の情報も探ることができたというわけである。



▲丸子の吐月峯柴屋寺に伝わる宗長木像

撮影：水野 茂